

## SURE: Shizuoka University REpository

<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

Title	韓国の統合教科「賢い生活」の特徴：日韓社会科教育比較考(4)
Author(s)	馬居, 政幸; 夫, 伯
Citation	静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇. 35, p. 37-60
Issue Date	2004-03
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00002897">http://doi.org/10.14945/00002897</a>
Version	publisher
Rights	

This document is downloaded at: 2015-07-11T13:15:48Z

## 韓国の統合教科「賢い生活」の特徴

— 日韓社会科教育比較考 — (4)

Characteristic of Integrated Subject "Inquiry Life" in Korea

馬 居 政 幸・夫 伯  
Masayuki UMAI and Baek Poe

(平成15年10月1日受理)

### はじめに

我々は、1995年以来、次の4種の科学研究費による調査研究を韓国において実施してきた。

- ① 平成7（95）年度科学研究費補助金（国際学術研究）「韓国における日本の大衆文化についての調査研究」（研究代表者 馬居政幸）
- ② 平成8（96）年度～平成10（98）年度科学研究費補助金（国際学術研究）「韓国における日本の大衆文化についての調査研究」（研究代表者 馬居政幸）
- ③ 平成11（99）年度～平成13（01）年度科学研究費補助金（基盤研究B2）（研究代表者 馬居政幸）  
にもとづく研究成果報告書『韓国における日本文化開放についての調査研究』
- ④ 平成14（02）年度～平成16（04）年度科学研究費補助金（基盤研究B2）「韓国における日本文化開放と韓日相互理解教育についての調査研究」（研究代表者 馬居政幸）

これらの調査研究の成果については、静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科科学篇）を中心に発表してきた。本年度も「韓国における日本大衆文化の調査研究（7）」を静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科科学篇）第53号に報告した。

他方、調査研究の過程で得た多様な知見や資料等については、機会あるごとに教育雑誌等に発表してきた。その中から、特に社会科教育に関係するものを集めて、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）の場をかりて報告してきた。本稿もまたその一貫として、韓国の「賢い生活」に関する調査研究をもとに報告するものである。

なお、「賢い生活」は本文で詳論するように、韓国の初等学校1、2学年で実施される統合教科の一つである。基本的には科学（理科）と社会の統合教科として位置づけられ、社会科と理科に代わって誕生した日本の生活科と非常に近い教科である。その意味で、「賢い生活」は生活科と同様に自国民の社会認識の型をつくる教科ともみなすことができる。その分析は、我々の研究課題である日本と韓国の相互理解教育推進にとって、重要である。そのため本稿では日本との比較を前提に、広く韓国の学校教育全体を俯瞰する位置から、「賢い生活」の特徴について報告する。

### 1. 韓国の学校制度と教育課程の特色

#### 1) 学校制度の特徴

これまで韓国の学校教育は、教科書問題を代表して日本を批判する内容（反日教育）とともに紹介されることが少なくない。だが、学校制度の構造は、その問題点も含め日本と共通する部分が多々ある。教科構成や教育内容などの教育課程も類似点が多い。その第一の理由は、1945年の日本の敗戦による解放・独立を経て1948年に建国した大韓民国が、基本的に日本統治時代の教育資源を引き継いだことにある。加えて、建国時の「教授要目」に始まり七次にわたる「教育課程」（学習指導要領）の策定も含め、米国の強い影響下で教育改革がなされてきたこともその背景としてあげられる。

たとえば、学校制度は日本と同様に、初等学校6年、中学校3年、高等学校3年、大学校4年（総合大学を大学校、総合大学の学部や単科大学もしくは2年制の専門大学を大学と称す）を基本にした、いわゆる6-3-3-4制と総称される段階型（単線型）である。教育課程では、社会科が日本よりも早く、SOCIAL STUDIESをモデルに米軍政下の1946年に設置されに（当初は社会生活科との訳を使用）。いずれも、日本の戦後教育改革と重なる特徴である。

また、当初義務教育は初等学校だけであった。だが現在は中学校が含まれるようになっただけでなく、高等学校の進学率も極めて高く、2001年度は99.6%とほぼ全入に近い状況にある。さらに大学（校）の進学率も非常に高く、2001年度は70.5%である。特に近年は、日本のほぼ二倍の速さで進行する少子化の影響と重なり、大学（校）は供給過剰の状態になりつつある。しかし、ソウル大学校を頂点とする大学間の評価のヒエラルヒーが国民各層に根強く、度重なる入試改革にもかかわらず、受験競争の弊害を問題視する声は高い。

現在の選抜制度では、特殊目的高校などの特別な高校に進学する場合を除き、中学から高校への進学は学区単位に配置された複数の高校に均等に分配され、選抜のための試験は行われない。その結果、進学のための競争は大学（校）への選抜試験に集中することになる。

大学（校）入試は11月初旬に実施される日本のセンター試験に相当する大学修学能力試験とその得点をもとに選択した志望大学（校）による選抜試験にわかれる。特に、実質的に志望大学が決定される大学修学能力試験に対する国民の関心は高く、毎年試験終了後に試験問題の当否が大きな話題となる。

また、高校入学試験はないものの、有名大学（校）進学に有利とされる高校が含まれる大都市の特定学区に居住場所を移す家族が少なくなく、社会的に問題視される。また、進学準備のための日本の予備校に相当する学院や塾に通う者も多い。その経済的負担の高さに加え、特定学区への移動が高所得者に多いこと、あるいはこのような韓国内の過度の競争を避け、よりよい教育条件を求めて初等学校段階から米国やカナダに留学させる家庭も少なくなく、階層間格差の進行や公正性の保障が問題視される。

なお、入学試験準備だけではなく、各種外国語や国家試験の準備のため、大学入学後に学院に通う学生も多く、ダブルスクール化が進行している。さらに、同様の現象は初等学校段階でも顕著である。伝統的な補修塾や専門塾（英・数・論述）には半数以上が通い、外国語会話、算盤、習字、雄弁、コンピュータ、舞踊、韓国舞踊、水泳、テコンドー、スポーツクラブ（蹴球、籠球、野球など）、美術、楽器（ピアノ・バイオリンなど）などの塾、学院、クラブなどに複数通う子どもも少なくないことが、我々の調査でも確認している（「韓国における日本大衆文化の調査研究（7）」参照）。

他方、就学前教育の中心は幼稚園であるが、その就園率は2001年で40%と高くない。しかし、女性の労働力率の高まりとともに、保育園も含めた就学前教育への要求は高い。

## 2) 教育課程の特徴と統合教科の位置づけ

### (1) 教育課程の特徴

韓国の教育課程は、米軍政下の「教授要目」に始まり、建国後は教育課程が策定され、6度にわたる改訂をへて現在は「第7次教育課程」のもとにある。各「教育課程」の期間と特徴を列記する。

教授要目期(1946～1954)

- 第1次教育課程期(1954～1963) …… 教科中心教育課程
- 第2次教育課程期(1963～1974) …… 経験中心教育課程
- 第3次教育課程期(1974～1981) …… 学問中心教育課程
- 第4次教育固定期(1981～1988) …… 経験・学問・人間中心観点の統合
- 第5次教育課程期(1988～1992) …… 統合と地域化の強調
- 第6次教育課程期(1992～1997) …… 民主市民資質育成の強調
- 第7次教育課程期(1997～) …… 学習者中心教育課程

第1次から第7次の「教育課程」は、いずれも日本の学習指導要領と同様に、韓国政府の責任のもとで作成・告示されてきた。すなわち、かつては文教部、現在は教育人的資源部（通常は略して教育部と称す）の指導の下に、専門家集団ならびに韓国教育開発院や韓国教育課程評価院などの政府機関が中心になって開催する委員会等で改訂の方向、各教科の性格、目標、内容、教授方法、評価方法などが検討・決定されてきた。たとえば、「第7次教育課程」の場合1996年に政府内に有識者や政治家を含めた教育改革委員会が設置され、そこで提示された基本的な方向のもとで、教育課程として具体化するために、教育部により設置された教育課程委員会において、総論チームと各論（教科、領域）チームに分かれて検討進められた。委員会を構成するメンバーの中心は教育学者だが、父母や教員団体の代表も参加。さらに全国主要都市で公聴会を開催することにより、国民各層の意見を取り入れ、2年間の検討を経て、教育部により1997年12月に告示された。

この「教育課程」の拘束力は非常に強く、国公私立を問わず、ほぼ全ての初等学校から高等学校までの各学校の教育内容、方法、評価の基準となる。その内容を徹底するために教育課程評価院が中心になって全国各地でワークショップが開催され、広域市・道の教育庁や地域教育庁（市、郡、区）による教員研修や指定校による研究が実施された。また、韓国の授業では、伝統的に教科書が非常に重視されるが、その内容は教育課程に基づき編纂される。

韓国の教科書は1種（国定）と2種（検定）に分かれる。第7次教育課程では、当初、国史、国語、道徳の教科書のみ1種として残し、他の教科書は全て2種にする予定であった。しかし、教育課程が告示された97年12月に韓国は国家経済が破綻寸前になる金融危機に陥った。そのため、教科書の水準を維持するために、初等学校の教科書は全て1種に据え置かれた。したがって、現在は、初等学校の全教科ならびに中学校と高等学校の国史、国語、道徳の教科書は全国同一である。他方、中学・高校の他の教科の教科書は、検定された教科書のなかから、各学校単位に担当教科の教員によって選択・決定されている。

「教育課程」に記載された内容は、「第7次教育課程」の場合、その基本的な性格から、最低基準ではなく、実際に授業で教師が教える内容をトータルに網羅するものとなっている。ただしそれは一律に全てを強制することではない。

「第7次教育課程」は「需要者中心」あるいは「学習者中心」教育を基本命題に改訂された。それは一方で学習者の能力や興味を尊重する「個別化学習」と「水準別教育課程」として、他方で学習者が学習内容の選定や学習過程に能動的に参加する「自己主導的学習」として具体化される。特に水準別教育課程は「教育課程」全体を規定する原則となり、初等学校1年から高等学校1年までの10年を「国民共通基本教育課程」、高等学校2、3年を「選択中心教育課程」と位置づける。さらに、基本教育課程

は共通履修部分とより高度な内容を求める者のために用意した「深化課程」にわかれる。また学習が遅れる者には「補充課程」が用意される。したがって、「第7次教育課程」は、誰もが共通に履修すべき内容と学習者の選択にまかされた内容と特定の者のみ学習する内容によって構成されている。

このように「第7次教育課程」は明確な教育理念のもとに非常に論理的に組み立てられている。これは韓国教育課程が研究者により作成される割合が高いことを反映したものである。このことは最新の教育理論に基づき作成できる点でプラスだが、実際に授業を行う教師との間にズレを生じさせるマイナス面があることを否定できない。

「第7次教育課程」においても、国民共通教育基本課程と選択中心教育課程の区分や深化課程の意義は明確だが、基本課程の量が多く、深化課程に進む余裕がないことが問題にされる。また深化課程の実践方法が明確でなく、補充課程を実施する条件も整っていない。選択中心教育課程においても、20名以上の希望があれば新科目設置が原則だが、実際には人的条件を整えることができず、校長の判断で柔軟に運営せざるをえないようだ。また、本来の趣旨と異なり、大学受験の有利不利が選択基準になる傾向も指摘される。

水準別教育課程とともに学習者中心教育の具体化として提示された個別化学習や自己主導的学習も同様の問題点がある。しかし、新たな可能性が生まれていることも指摘したい。1997年の経済危機を契機に国家戦略として構築したIT（情報技術）化の成果である。教育部は2001年度から全授業の約30%にICT（情報コミュニケーション技術）活用を求める一方で、初・中・高の全教員にノートパソコンを配布し、ICT活用に関する教員研修（最低60時間）を義務付けた。さらにKRIBET（韓国教育學術情報院）は多くのICT教材を開発し、グラフィックや学習モジュールの形式でビデオやCDに収める一方で、WEB上に公開した。教員養成系大学や研究機関あるいは市・道の教育庁でも開発を進め、全国の教師が利用できるようデータベース化された。教師も授業の進行状況や自己学習のための資料を学校のホームページで公開し、子どもと親が家庭で自由にアクセスできるようにした。ICT活動の拡大が個別化学習や自己主導的学習の新たな実践方法を生み出したわけである。

(2) 統合教科の位置づけ

次の図表1は、「第7次教育課程」における国民共通教育基本教育課程から教科等の構成、学年配置、授業時数の規定、1単位時間の規定等についてまとめたものである。

図表1 国民共通教育基本教育課程

区分	学校 学年	初 等 学 校						中 学 校			高 等 学 校	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
教 科	国 語	国語 210 238		238	204	204	204	170	136	136	136	選 択 科 目
	道 徳			34	34	34	34	34	34	34	34	
	社 会	数学 120 136		102	102	102	102	102	102	136	170	
	数 学			136	136	136	136	136	136	102	136	
	科 学	正しい生活 60 68		102	102	102	102	102	136	136	102	
	実 科			・	・	68	68	68	技術・家庭			
		賢い生活 90 120		102	102	102	102	102	102	102	102	
	体 育			102	102	102	102	102	102	68	68	
	音 楽	楽しい生活 180 204		68	68	68	68	68	34	34	34	
	美 術			68	68	68	68	34	34	68	34	
外 国 語 ( 英 語 )	私達は1年生 80 ・		34	34	68	68	102	102	136	136		
最 良 活 動	60	68	68	68	68	68	136	136	136	204		
特 別 活 動	30	34	34	68	68	68	68	68	68	68	8単位	
年 間 授 業 時 数	830	850	986	986	1088	1088	1156	1156	1156	1224	144単位	

(教育部告示第1997-15号 別冊2、P.6)

- ① この表の国民共通基本教育期間に提示されている時間数は34週を基準にした年間最小授業数である。
- ② 1学年の教科、裁量活動、特別活動に配当された時間数は30週を基準にしたものである。
- ③ 1時間の授業は初等学校40分、中学校45分、高等学校50分を原則とする。但し、気候、季節、学生の発達程度、学習内容の性格などを考慮して実情に合うよう調整することができる。
- ④ 11、12学年の特別活動と年間授業時間数に示された数字は2年間履修しなければならない単位数である。

初等学校1年から高等学校1年までが国民共通基本教育課程、高等学校2、3年を「選択中心教育課程」と位置づける点は日本と異なる。しかし、道徳が教科であり、実家（家庭科、技術科）、数学（算数）、科学（理科）、美術（図工）など名称がやや異なるものの、教科構成や学年配置などは日本と大きく変わるわけではない。また、時間数は日本より少ないが、初等学校の1年から「総合的な学習の時間」に相当する「裁量活動」が設置されている。

その中で初等学校の低学年には国語と数学に加えて、「正しい生活」（1年：60時間 2年：68時間）、「賢い生活」（1年：90時間 2年：102時間）、「楽しい生活」（1年：180時間 2年：204時間）、「私たちは1年生」（80時間）という四種の統合教科により構成される統合教育課程がおかれている。

「第7次教育課程」ではこの統合教育課程全体の「性格」を次の四種の観点から位置づける

- ① 初等学校低学年の発達特性を基礎にした統合教育課程である。
- ② 活動中心の生活領域で構成される教育課程である。
- ③ 児童の生活経験を根本にする教育課程である。
- ④ ひとつの主題の下に多様な活動と経験が統合され、弾力的に運営される教育課程である。

また同様に総合教育課程全体の「目標」を次のように簡潔に記している。

- ① 新しい学校環境への適応を通じて楽しい学校生活を行う。
- ② 日常生活に必要な基本生活の習慣と礼儀および規範を知り、習慣化して健全な人間性と円満な人間関係を形成する。
- ③ 自分と社会および自然との関係を理解することによって、賢く行動できる能力と態度を育てる。
- ④ 多様で楽しい活動を通して、健康な心身を育て、創意的な表現能力と審美的な態度を育てる

韓国の新学期は「3.1独立運動記念日」の翌日の3月2日から始まる。その入学時から一ヶ月の間に行われる「私たちは1年生」の目標となるのが①である。また②は道徳につながる「正しい生活」、③は科学と社会につながる「賢い生活」、④は体育、音楽、美術につながる「楽しい生活」のそれぞれ「目標」になる。

このような「性格」や「目標」に関する記述から、統合教育課程は基本的に日本の生活科と類似した教科であると理解できる。特に「性格」はそのまま日本の生活科を支える世界の特徴とすることも可能である。それに対して四種の教科に分化する「目標」の場合は生活科とずれる面がある。たとえば②は「生活上必要な習慣や技能の育成」という生活科の目標と一部重なるものの、道徳に直結する「正しい生活」と生活科は異なる教科であることを示している。また①と④は実際の活動過程で生じるものとして共有する面があるが、これ自体を生活科の目標とみなすことはできない。したがって、日本の生活科に最も近いのが③の「賢い生活」となる。

## 2. 「賢い生活」の教育課程上の位置づけの特徴

### 1) 低学年統合教科の一つ

上述したように、「賢い生活」は、初等学校1学年と2学年に配置された統合教科の一つである。授業時数は1学年が90時間、2学年が102時間である。1学年の時間数が少ないのは、入学時より一ヶ月間は、統合教科の一つである「私たちは1年生」を実施するためである。

また、「賢い生活」は、「第4次教育課程期」に、数学（算数）と科学（自然）の内容を統合した教科書を「賢い生活」という名前で編纂したことに始まる。しかし、科学と数学の統合では計算能力が弱くなるとの判断から、第5次教育課程では数学が分離し、自然現象科学を中心にした科学的探究能力と科学的態度を育てる教科に変わった。

さらに、「第6次教育課程」において、学習者の周囲の社会現象と自然現象をあわせて対象にする探究能力の育成を重視する統合教科として位置づけられるようになった。

しかし、「第6次教育課程期」の実践において、3学年以降の後続学習である社会と科学の内容の影響を受けすぎたという反省から、「第7次教育課程」では、社会と科学（理科）の統合という性格は引き継ぐものの、後続教科との直接的な連携性を考慮せずに統合性を重視する観点から改訂が行われた。

### 2) 教育課程の構成の特徴

「第7次教育課程」における「賢い生活」の記述は、17頁にわたって、つぎのような項目により記述される。

1. 性格・・・1頁
2. 目標・・・1頁
3. 内容体系（ア.内容体系　イ.学年別内容）・・・9頁
4. 教授・学習方法（ア.学校教育課程の運営　イ.教授・学習資料開発）・・・5頁
5. 評価・・・1頁

この項目と頁数が示すように、「教育課程」には、「賢い生活」を各学校で実施するうえで、教師が行うべき教育内容、教育方法、評価方法などが基本的に網羅されている。さらに、「4.教授・学習方法」では、「ア.学校教育課程の運営」において、16項目にわたり学習活動を進めるための条件整備や学校全体の取り組み方について列記されている。特に、これまでの韓国の学校教育では実践される機会が少なかった新たな学習方法については、かなり詳細に記している。その代表が次の項目である。（番号は「教育課程」に記された項目の順番を示す）

- (6) 学習の内容および活動によって、教室の空間を多様に変化させて、学習についての興味と参加度を高めるようにする
- (8) 学習効率を増進するために必要だと判断される場合、学校学習時間にためらいなく学校の外での学習も実施し、児童の状況を考慮し無理な学習にならないようにし指導する。
- (11) 教育課程に提示された活動内容と資料は、学校の実情、地域社会の特性、時事性に適合するように、学校と教師の裁量によって再構成できる
- (13) 指導内容によっては必要な時間を連続して運営できるし、他の教科と統合して運営することもできる。

いずれも、教科書中心の画一的な授業が主であった韓国の学校と教師にとって、大きな変化をもた

らす指示といえる。さらに最後の16番目の項目は「賢い生活の題材構成は統合の精神を極大化することができるよう構成、提示する。」として、1頁半を使って題材構成表のモデルを掲載している。(資料参照)

同様に、「イ.教授・学習資料開発」においても、19項目にわたり非常に詳細かつ具体的な指示を伴う表現によって記載されている。たとえば、4番目の項目に「(4) 児童たちが興味を持って面白く読んで学べるように構成するべきであり、そのため、次の事項に留意する」とあるが、そこには次の4点が小項目として記載される。

- (ア) 学習の動機を引き起こす内容・活動を提示する。
- (イ) 児童の生活に関連がある素材を選択する。
- (ウ) 児童の発達水準に合う内容・活動・語彙等を提示する。
- (エ) 児童が楽しみながら遂行できる活動を提示する。

さらに、「5.評価」においても、4項目と量的には少ないものの、次に示すように、その記述は非常に具体的である。

- ア. 評価は各個人の活動を中心に実施する。しかし、結果を相互比較したり、等級を付けたりして人間関係や自我意識を阻害することはないようにする。
- イ. 教育課程に提示されている次のような重要目標に対する成就水準を評価するが、多様な評価方法を使って知識、技能、態度の行動領域と内容領域の様力な要素が包括的で均衡的に含まれるようにする。
  - (1) 自分と社会及び自然との関係に対する基礎的知識の理解
  - (2) 様々な状況の中で正しく判断し行動できる能力と態度
  - (3) 観察・経験したことを正確で、創意的に表現できる能力
  - (4) 周囲の現象を理解するために必要な観察分類、測定、意思疎通等の能力
  - (5) 周囲の現象に対して好奇心を持って、持続的に調べようとする態度
- ウ. 学習の結果よりは普段の学習課程中の探究的な活動と肯定的な生活態度を中心に評価する。
- エ. 評価はなるべく学生達の興味や好奇心、自発的活動、創意的な思考等を高められるように、積極的で、肯定的な側面で行われるようにする。

### 3) 教科としての性格と目標の特徴

第7次教育課程の「賢い生活」に関する記述の冒頭には「性格」と題して、次のように記されている。

“賢い生活”は、身の周りの現象に対して関心を持って自身と社会及び自然との関係を考えてみさせることによって、児童が様々な状況の中で工夫しながら、賢く生きることができる生活の基礎を育成する統合教科である。

初等学校低学年の児童は、家庭、学校、近隣、町内などの日常生活の場で、社会現象と自然現象をひとつの環境として経験することになる。したがって、この段階の児童には、社会現象や自然現象を別々に学習するより、この二つを統合して学習することが望ましい。このため“賢い生活”では、調べる、集めて分類する、はかる、調査・発表する、つくる、遊ぶなどの基



礎的な探求行動を経験できるように構成して、具体的な経験と活動を中心に、自分自身、社会、自然を統合的に扱い、これらの相互関係を気づかせる。さらに、日常生活の中で出会う問題を解決するために、様々な方法を工夫して、正しく判断し、賢く生きる自主的生活の基本能力と態度を養うことに強調点を置く。

したがって、児童が社会と自然に関心を持ち、身の周りに生じる様々な具体的な現象を見て、聞いて、感じる中で、観察、分類、測定、討議、作成、遊びなどの多様な活動が行われるようにする。

この教科は、初等学校1,2年の水準で養うことができると判断される基礎的な探究活動を統合的に扱うことによって、3年生からの数学、社会、科学、実科等の教科活動と連携がなされるように指導する。

冒頭の3行が狭義の意味での教科の性格である。次いで、このよう教科を設置した子どもの発達上の特徴を示したあと、学習内容や学習方法の特徴が述べられ、最後に上位学年との関係が指摘されている。これらはいずれも次の「目標」以下の項目で具体的に展開されるものである。したがって、「性格」は教科の狭義の意味の性格と「教育課程」に記された内容の概要を示しているといえる。

このような「性格」のあとに「目標」が次のように表現されている。いずれも教師が子どもに対して育成すべき課題を示したものである。冒頭の3行で、「性格」の冒頭3行に対応した教師の課題を示し、その具体化を5項目に分けて展開している。

自分の身の周りで生じる様々な現象に対して好奇心と関心をもち、具体的な活動と経験を通して、自分と社会および自然との関係を気づかせることによって、様々な状況の中で、賢く行動できる能力と態度を養う。

ア. 自分自身と他の人との関係を理解し、お互いに仲良く生きていける能力と態度を養う。

イ. 自分と身の周りの環境に気づき、日常生活で直面する問題を様々な方法を工夫して、自ら解決しようという態度を養う。

ウ. 経験することをさまざまな方法で表現してみて、身の周りの現象を理解するのに必要な初歩的な探求能力を養う。

エ. 動物と植物の育つ様子をよくみて、生命を尊重し、愛する心を養う

オ. 身の周りの現象に対して好奇心をもち、継続的に調べようとする態度と自ら学ぶ習慣を養う。

### 3. 「賢い生活」の内容構成の特徴

#### 1) 「内容体系」の特徴

「賢い生活」の「内容」は「ア. 内容体系」と「イ. 学年別内容」に分けて記述される。

「ア. 内容体系」は、次のような1頁大の図表として示される。

まず、「基礎探求活動」として、「調べる」、「集めて分類する」、「はかる」、「調査・発表する」、「作る」、「遊ぶ」が提示される。そして各「基礎探求活動」単位に各学年の「活動主題」が1学年は13種、2学年15種にわけて示される。さらに、「活動主題」単位に「自分」、「社会」、「自然」という3種の「領域」との関わりが示される。

図表2 「内容体系」

基礎探求活動	一学年			二学年				
	活動主題	領域			活動主題	領域		
		自分	社会	自然		自分	社会	自然
調べる	○体をしらべる ○身の周りの動植物を探してみる	V		V	○自分の家を調べてみる	V	V	V
集めて分類する	○物を整理する	V	V	V	○身の周りを調べる ○身の周りのものを集める ○木の実や種を集める		V	V V V
はかる	○背の高さを比べてみる ○距離をはかってみる	V		V	○体重をはかる ○時間をはかる	V	V	V V
調査・発表する	○自分の家の行事を調べる ○私たちの生活を支えてくれる人を調べる ○一日の間の変化を調べる ○家族の構成員を調べる	V	V	V	○自分の近隣を調べる ○時間の流れにそった変化を調べる ○動物や植物の育つ姿を観察する	V	V	V V V
つくる	○道具を使う	V		V	○おもちゃをつくる ○絵地図を描く ○生活の計画をつくる	V	V	V V V
遊ぶ	○安全に生活する ○遊び場で活動する ○病院遊びをする	V	V	V	○お店やさんごっこ ○水鉄砲あそび ○影ふみあそび	V	V	V V V

このように「内容体系」では、一方で、「賢い生活」の内容を構成する活動主題が6種の基礎探求活動を基準に組み立てられていることが示される。これは様々な状況のなかで「性格」では「賢く生きる」、「目標」では「賢く行動する」と表現された「生活の基礎」(性格)となる「能力や態度」(目標)の育成を基準に内容が構成されていることを示す。

また他方で、活動主題の特性を「自分」、「社会」、「自然」、という3種の領域によってチェックするのは、この教科の特徴が、「自分と社会及び自然との関係」を「日常生活の場」において、「社会現象と自然現象を一つの環境として経験する」ための「具体的な活動」を通して、「考えさせ」(性格)たり「気づかせる」(目標) ことによって、「賢く生き」(性格) また「賢く行動する」(目標) ための基礎探求活動を実践させることにあることを示している。

すなわち、「内容体系」として表された図表は、賢い生活の内容を構成する活動主題が、教科の性格や目標として記されたことに基づいて、非常に論理的に考案されていることを示唆している。

さらに、その活動主題を具体的に実践する際に必要となる事項を示したのが「イ.学年別内容」である。まず、1学年の内容は、内容体系において「活動主題」として提示された次の13種の項目単位に記述される。

(1) 体を調べる、(2) 身の周りの動植物をさがしてみる、(3) 物を整理する、(4) 背の高さを比べてみる、(5) 距離をはかってみる、(6) 自分の家の行事を調べる、(7) 私たちの生活を支えてくれる人を調べる、(8) 一日間の変化を調べる、(9) 家族の構成員を調べる、(10) 道具を使う、(11) 安全に生活する、(12) 遊び場で活動する、(13) 病院遊びをする

2学年も同様に、次の15種の「活動主題」単位に記述される。

(1) 自分の家を調べる、(2) 身の周りを調べる、(3) 身の周りのものを集める、(4) 木の実や種を集める、(5) 体重をはかる、(6) 時間をはかる、(7) 自分の近隣を調べる、(8) 時間の流れによる変化を調べる、(9) 動物や植物の育つ姿を観察する、(10) おもちゃをつくる、(11) 絵地図を描く、(12) 生活の計画をつくる (13) お店屋さんごっこ、(14) 水鉄砲あそび、(15) 影ふみあそび

そして、この28種の活動主題それぞれに、説明文と活動内容が数項目にわたり提示される。たとえば、1学年の最初の活動主題である「体をしらべる」は次のように記述される。

#### (1) 体をしらべる

自分自身の体をよく見て、他人と比べて体の構造を把握し、その中で感覚器官の名前と特徴及び働きを言う。

- ① 自分自身、友達の体を観察する
- ② 感覚器官の名前、仕事を調査する
- ③ 感覚器官の共通点を捜してみる

また、活動内容が7項目と最も多い2学年の「木の実や種を集める」は次のように記される。

#### (4) 木の実や種を集める

さまざまな実や種子をよく見て、その特徴を捜し出して基準を立てて分類し、その実や種子を結ぶ植物の大切さを感じる。

- ① 実や種を集める
- ② 実や種をよく調べる
- ③ 実や種の特徴をさがし出す
- ④ 実や種子を似ているものどうしにまとめる
- ⑤ その実や種を結ぶ植物の名前を発表する
- ⑥ 実や種の保管方法を調べる
- ⑦ 実や種子ができるまで面倒を見てくれる方を調べて感謝の心を持つ

いずれも、子どもたちの学習活動の内容や活動の仕方、あるいはその活動によって獲得すべき「能

力や態度」(生活の基礎となる)まで、非常に具体的に記述されている。

## 2) 内容構成の特徴

「ア.内容体系」では論理的に、また「イ.学年別内容」では具体的に内容が記述されているが、これらは、そのまま実践することを求めたものではない。実際の授業の順序を示すものでもない。「イ.学年別内容」の冒頭に次のような注記が置かれている。

「この学年別の内容に提示されている事項は、例示的な性格をもっているもので、地域及び学校の実情、学生の発達程度によって、目標達成にふさわしい活動内容に、学校で再構成して、総合、運営するようにする。」

先に「4.教授・学習方法」の「ア.学校教育課程の運営」について紹介した部分でも確認したが、「身の周り」の「人」や「自然」や「社会」における「活動」を重視する観点からの注記であると考えられる。

また、28種の活動主題の表記の順番は、学習の順序を示すものではない。あくまで、身に付けるべき基礎探求活動に基づき考案されたものであって、実際の子どもたちの活動の区分を示すものではない。「4.教授・学習方法」の「イ.教授・学習資料開発」の第2項「統合教科の精神が具現されるようにする。」には、次のように具体化の方向を提示する。

(ア) なるべく多くの内容・時間で統合が成り立つようにする。

(イ) なるべく多様な形式の統合が成り立つようにする。

(ウ) 統合の主題は児童たちが生活で経験したこと、児童たちが関心をもっているようなこと、相互に異なる多様な内容を統合できることから探す。

(エ) 統合は適切に成り立つようにする。すなわち、別の領域の内容が自然に連携、統合され設定した目標を効果的に達成するようにする。

(オ) 統合するのがむずかし内容や、統合するより分離して指導したほうが教育的に効果あると判断される内容に対しては、無理な統合はさける。

すなわち、28種の活動主題は、実際に子どもたちがそれぞれの生活の場に応じた経験に基づく活動をする際に、統合されるべき要素とみなすことができる。いいかえれば、一つ一つの活動主題を実践するために活動が組まれるのではなく、子どもたちの活動のなかにこれらの主題が結果として適切に組み込まれていることを求めているといえる。

実際の授業では、教科書が用いられるが、その内容は、28種の活動主題に基づくものではない。「賢い生活」の教科書は、先に紹介したように、第1種であるため、全国の初等学校で同一のものが使用される。そのため、各地域の特性を積極的に取り入れた多様な教科書を作ることはできないが、子どもたちの生活の状況や変化に即した内容によって構成されている。具体的には、季節の変化を軸に、春、夏、秋、冬における子どもたちの生活において、自分、社会、自然という3領域が多面的に表現できるように編纂されている。

また、「4.教授・学習方法」が詳細に記されているのは、学習内容の拘束するためではない。その内容から、各学校で独自に賢い生活の「性格」と「目標」を具体化できることを求めることの反映とみなすことができる。

#### 4. 日本の生活科との比較による「賢い生活」の特徴

これまでに述べてきたことから、韓国の「賢い生活」と我が国の生活科の間には類似点が多々あることは明白であろう。しかし、相違点もある。3点指摘したい。

その第一は「教育課程」の記述内容が量的にも質的にも多量かつ具体的ということである。まず量的には、生活科の内容に相当する学習主題が28種あることによって示される。さらに、その記述形式も学習方法を具体的に示すものである。

また質的には、内容体系が示すように、子どもの生活よりも論理性を重視した観点から組み立てられていることである。それも獲得すべき能力や態度を基準に活動主題が考案されている。

この二つの特徴は、「例示的」との注記や学校独自の統合を求める「教授・学習方法」での記述はあるものの、28種の活動主題を具体化した学年別内容を順次実践する、という学習活動に陥る危険性があることを示唆している。事実、数年間の授業実践を踏まえて、全ての活動主題を統合した学習活動を行うことは非常に困難であるとの報告がなされている。統合の理念とは別に、実践の場では、活動主題を全て実践することが求められるゆえに生じる批判である。

しかしこのことは他方で、獲得すべき能力や態度の論理的帰結として考案された活動主題を、学習活動の適否を判断する基準として用いることの有効性を示唆していると考える。また、詳細な学年別内容は、どのような実践が必要かを広く明示する機能を潜在的にもっているとも考えられる。あるいは、数年の実践によって問題点が明確になるということは、適否の判断の基準が明確である証左とみなすこともできる。

第二の相違点は3種の統合教科との関係である。

第7次教育課程では、初等学校1, 2年の教科は、国語、数学と4種の統合教科から構成されるが、もともとは統合教科のみであった。そこから国語と数学が分離したと考える方が、教科の形成過程からみると正しい。すなわち、統合教科としての生活は、「第4次教育課程」において「正しい生活（道徳+国語+社会）」、「賢い生活（自然+数学）」、「楽しい生活（音楽+美術+体育）」として新設され、「第5次教育課程」で「正しい生活」から国語、「賢い生活」から数学が独立した。「第6次教育課程」により、社会が「正しい生活」から「賢い生活」に移動し、「正しい生活」が道徳として独立するとともに、「賢い生活」が社会と自然の統合として再構成された。

したがって、理科と社会を廃止して生活科を新設したわが国とは成立の過程が異なる。その結果、韓国では、独自の教科というよりも3年以降に継続する社会と科学という教科の統合という性格を残すことになる。それが内容の多さの原因の一つとも指摘される。

ただし、「第7次教育課程」では、この社会と科学の内容を合わせたという性格を超えた統合の原理による「教育課程」の策定を試みた。それが6種の基礎探求活動を基準にした内容体系の構築であった。また、実質的に授業実践の方向を大きく枠付ける教科書の内容を、子どもたちの生活を変化する季節のなかで表現することから編纂したことも重要である。社会と科学の内容の統合から出発したことが、その問題点の克服の方途を生み出したとみなすこともできる。

また、同様に他の3種の統合教科との関係も統一された「性格」と「目標」のなかに位置づけられることにより、より大きな統合を可能にする基盤とみなすことができる。

同時に、入門期の「私たちは1年生」、道徳につながる「正しい生活」、音楽・美術・体育の統合である「楽しい生活」が存在するために、「賢い」という教科の「性格」と「目標」を差別化することにより明確にした学習活動を実践することも可能になる。

第3の相違点は、教育課程を実践する基盤としてのICT活動の拡大である。

既に教育課程全体の特徴を紹介する際に、「第7次教育課程」の中心に位置する学習者中心教育の具体化として提示された個別化学習や自己主導的学習の実践化が危ぶまれたが、国家戦略としての急激なIT（情報技術）化とその教育版であるICT（情報コミュニケーション技術）活用の進行によって新たな可能性が開けてきていることを指摘した。この影響は、「賢い生活」の実践化の過程においても見出すことができる。すなわち、「具体的な活動と経験を通して」という「目標」は、各教室に設置された教材提示装置、大型の液晶テレビ、それら进行操作するコンピュータを組み込んだ教師用机兼教卓という3点セットによって、新たな実践の方途が見出されつつある。すなわち、一方で、全国の教師や研究者によってストックされた巨大なデータベースを活用することから、一人の教師では時間的にも能力的にも不可能であった教材や教授方法を共有できる。他方、親や地域の人たちもホームページを共有することによって、授業作りに積極的に参加できる。また、子どもたちも、互いに自分の生活の様子を、すなわち身近な人たちの交流や地域の状況あるいは自然の変化を映像によって表現し、交換（コミュニケーション）することが可能になる。サイバー上の時間と空間を介してリアルな時間と空間が多面的に結びつけた活動が可能になったわけである。

このようなICT教育は、現在、韓国の初等学校では特別なものではない。①情報の理解と倫理、②コンピュータの基礎、③ソフトウェアの活用、④コンピュータ通信、⑤総合活動といった観点から構成された教育内容が、6学年を通して、教科単位に、いずれの初等学校でも実践されている。特に①を重視し、ネチケット教育やインターネット通信中毒検査及び予防指導を定期的実施する学校も多い。リスクを承知で先に進もうとする意思が読み取れる。

子どもたちが生きる社会や自然のなかに、さらには人と人の関係のなかに、文字通りICT（情報コミュニケーション技術）は不可欠の要素として組み込まれている。その意味で、「賢い生活」におけるICT活動は、学習活動の方法としてだけでなく、それ自体が基礎探究活動によって求める能力や態度を構成する重要な要素とみなすべきである。

そして、このことは、「自立への基礎を養う」ことを目標とする生活科においても無視できない課題と考える。賢い生活の性格や目標にある「賢く生きる」、「賢く行動する」は「自立」を構成する重要な下位概念であり、生活科が未来を生きる人たちの自立への基礎の育成に教科の存在意義を持ち続けるのであれば、ICTもまた未来を担う人たちが自立するために最も基礎となる技能とみなすことができるからである。

## 資 料

## 第7次教育課程における「賢い生活」の日本語試訳

## 1. 性格

“賢い生活”は、身の周りの現象に対して関心を持って自分と社会及び自然との関係を考えてみさせることによって、児童が様々な状況の中で工夫しながら、賢く生きることができる生活の基礎を育成する統合教科である。

初等学校低学年の児童は、家庭、学校、近隣、町内などの日常生活の場で、社会現象と自然現象をひとつの環境として経験することになる。したがって、この段階の児童には、社会現象や自然現象を別々に学習するより、この二つを統合して学習することが望ましい。このため“賢い生活”では、調べる、集めて分類する、はかる、調査・発表する、つくる、遊ぶなどの基礎的な探求行動を経験できるように構成して、具体的な経験と活動を中心に、自分自身、社会、自然を統合的に扱い、これらの相互関係を気づかせる。さらに、日常生活の中で出会う問題を解決するために、様々な方法を工夫して、正しく判断し、賢く生きる自主的生活の基本能力と態度を養うことに強調点を置く。

したがって、児童が社会と自然に関心を持ち、身の周りに生じる様々な具体的な現象を見て、聞いて、感じる中で、観察、分類、測定、討議、作成、遊びなどの多様な活動が行われるようにする。

この教科は、初等学校1,2年の水準で養うことができると判断される基礎的な探究活動を統合的に扱うことによって、3年生からの数学、社会、科学、実科等の教科活動と連携がなされるように指導する。

## 2. 目標

自分の身の周りで生じる様々な現象に対して好奇心と関心をもち、具体的な活動と経験を通して、自分と社会および自然との関係を気づかせることによって、様々な状況の中で、賢く行動できる能力と態度を養う。

- ア. 自分自身と他の人との関係を理解し、お互いに仲良く生きていける能力と態度を養う(育てる)。
- イ. 自分と身の周りの環境に気づき、日常生活で直面する問題を様々な方法を工夫して、自ら解決しようという態度を養う。
- ウ. 経験することをさまざまな方法で表現してみ、身の周りの現象を理解するのに必要な初歩的な探求能力を養う。
- エ. 動物と植物の育つ様子をよくみて、生命を尊重し、愛する心を養う
- オ. 身の周りの現象に対して好奇心をもち、継続的に調べようとする態度と自ら学ぶ習慣を養う(育てる)。

## 3. 内容

## ア. 内容体系

## イ. 学年別内容

※この学年別の内容に提示されている事項は、例示的な性格をもっているもので、地域及び学校の実

情、学生の発達程度によって、目標達成にふさわしい活動内容に、学校で再構成して、総合、運営するようにする。

<1年生>

(1) 体をしらべる

自分自身の身体をよく見て、他人と比べて身体の構造を把握し、その中で感覚器官の名前と特徴及び働きを言う。

- ① 自分自身、友達の身体を観察する
- ② 感覚器官の名前、仕事を調査する
- ③ 感覚器官の共通点を捜してみる

(2) 身の周りの動植物を探してみる (観察する)

周囲の動植物を調査して、それらが住む所と様相を調べた後、共通点を持ったもの同士を群れにして、それらを注意深く扱う態度を育てる。

- ① 周りの動物と植物名前、住む所を調べる
- ② 周りで見た動植物の特徴を捜してみる
- ③ 動植物を区分してその理由を言う
- ④ 動植物を扱う時、気を付ける点を発表する

(3) 物を整理する

自分のものを自ら整理、整頓する生活習慣と物資を節約して使う態度と周囲環境をきれいにしようとする心を持つ。

- ① 自分のもの整理、整理する
- ② 似ているものどうし集める
- ③ 掃除する
- ④ 捨てるものと捨てないものを区分する
- ⑤ 捨てるものの名前を書いて、ものを節約して、使わなければならない理由を発表する

(4) 背の高さを比べて見る

自分、家族、そして友達の背を指尺や、小さな棒を利用して測ってみて、順序を決める方法と長さの測定方法を知る。

- ① 自分自身、家族、友達の背をはかって見る  
[定規を使わないで指尺、足(両腕を伸ばして開けた長さ)、棒などを利用して]
- ② 背の順に並ぶ
- ③ 背をはかるさまざまな方法を発表する

(5) 距離をはかってみる

近い所と遠い所の距離を適当な方法[足(両腕の間隔)、歩み幅など]ではかって見て、距離によって適当な測定方法が分かる。

- ① 教室の中で距離を測る



- ② 運動場で距離を測る
- ③ 予測した距離と実際にはかった距離を比べる

(6) 自分の家の行事を調べる

我家の行事を調査して見て、各行事の特徴と行事の時、<sup>4</sup>自分がすべきことが分かる。

- ① 我家の行事(誕生日、祭祀、お正月、秋夕など)を調査する
- ② 行事に参加される方と自分との関係を調べる
- ③ 普通の日と行事がある日の違う点を捜してみ
- ④ 行事の日に私がすべきことを発表する

(7) 私たちの生活を支えてくれる人を調べる

私たちを助けてくださる方(教職員、警察、集配人、環境美化員など)を調べて、その方々に感謝の心を持つ。

- ① 学校で私たちを手助けて下さる方を捜してみる
- ② 隣近所で私たちを助けて下さる方を捜してみる
- ③ 私たちを助けてくださった事柄を発表する
- ④ 助けてくださった方々に持たなければならない心を発表す

(8) 一日の間の変化を調べる

一日の生活を時間によって調査して見て、時間の経過によって人がする仕事、昼と夜、周辺の自然のものなどが変化することを知る。

- ① 一日の間にする仕事を順番どおり発表する
- ② 一日の生活を絵で描く
- ③ 一日の間のする仕事の変化を捜してみる
- ④ 一日の間の自然現象の変化をよく見る
- ⑤ 昼と夜の差を発表する

(9) 家族構成員を調べる

自分の家と友達の家を調査して、家族構成員の役目、家族構成員と自分との関係を知り、彼らと互に睦まじく(睦まじく)過ごそうとする心を持つ。

- ① 自分の家、友人の家、隣の家族構成員を調査する
- ② 家族構成員と私との関係を調べる
- ③ 家族構成員のする事を調べる
- ④ 家族と睦まじく過ごすために自分が持たなければならない態度を発表する

(10) 道具を使う

よく使う道具(刀物、はさみなど)の名前と特徴、使い道を調査して、その道具使用方法を見に付け、安全に使う。

- ① 私たちがよく使う道具の名前を発表する
- ② 各道具の使い道と使う方法を調べる

- ③ 道具の使う方法を身に付ける
- ④ 道具を使って簡単な作品作る

(11) 安全に生活する

遊び(交通遊び、ままごとなど)を通じて安全に生活する習慣を持つ。

<交通遊び>

- ① 交通遊びする
- ② 乗物を分類する
- ③ 道を通う時に注意する点を発表する

<ままごと>

- ① ままごとする
- ② 食べる物と食べられない物を発表する
- ③ 食べ物を分類する
- ④ 安全な食べ物について発表する
- ⑤ むやみに食べてはいけないもの(瓶の中に入った洗剤など) 発表する

(12) 遊び場で活動する

遊び場での活動を通じて、遊び場の多くの施設を安全に使う方法を知り、施設を大切に扱う習慣を持つ。

- ① 遊び場でしたい遊びを選ぶ
- ② 遊び場にある遊び施設利用方法と遊び方法を調べる
- ③ 遊び場で守らなければならない点を調べる

(13) 病院遊びをする

病院遊びをしてみて、病気にかかった時、病院を正しく選択する方法を知り、病院で持たなければならない正しい態度を身に付ける。

- ① 準備を整える
- ② 病院遊びの時、引き受ける仕事を決める
- ③ 病院遊びをする
- ④ 病気にかかった時、行かななければならない病院を発表する。
- ⑤ 病院で持たなければならない正しい態度を身に付ける。

<2年生>

(I) 自分の家を調べてみる

自分の家と友達の家をよく見て、外観と屋内の様相との差と特徴を捜す。

- ① 自分の家と他の家(アパートと単独住宅、洋館と韓屋など)の見かけ及びその差異点を調べる
- ② 自分の家と 隣の家(の)屋内様相を比べる
- ③ 各部屋の使い道を調査する
- ④ 調査結果を発表する

## (2) 身の周りをよく調べる

我家の周り、学校の周りを見回して、道、建物、自然環境に対する関心を持って、安全に生活して、環境をきれいにしようとする心を持つ。

- ① 我家の周りとおたちの学校の周りをよく見る
- ② 前、後、右側、左側にあるものを言う
- ③ 草、木、花など自然の姿をよく見る
- ④ 道(人が通う道、自動車路、レールなど)を区分して、区分した理由を言う

## (3) 身の周りのものを集める

周辺にある物を集めてみて、その物を似ている物どうして仕分けすることができる。

- ① 自分が使うものを調査する
- ② 友達が使うものを調査する
- ③ 自分が使うものと友達が使うものを、似ている物どうして仕分ける。
- ④ 仕分けた理由を発表する

## (4) 木の実や種を集める

さまざまな実や種子をよく見て、その特徴を捜し出して基準を立てて仕分け(分類し、グループにする)、その実や種子を結ぶ植物の大切さを感じる。

- ① 実や種を集める
- ② 実や種をよく調べる
- ③ 実や種の特徴を捜し出す
- ④ 実や種子を似ているものどうしにまとめる(仕分ける、グループにする、分類する)
- ⑤ その実や種を結ぶ植物の名前を発表する
- ⑥ 実や種の保管方法を調べる
- ⑦ 実や種子ができるまで面倒を見てくれる方を調べて感謝の心を持つ

## (5) 体重をはかる

自分と家族、そして友達の体重をはかる活動をしてみて、重い方と軽い方を区別することができる。

- ① 自分自身、友達、家族の体重はかってみる
- ② 予想と実際の重さが違う場合を捜してみる(ほっそりするが体重が重い場合など)
- ③ 重いものと軽いのを区別する

## (6) 時間をはかる

時間を調べる活動を通じて、時間をはかる方法を知り、時間によって人がすることと自然が変化することを知る。

- ① 時刻を言う(起きた時刻、眠った時刻など)
- ② 時間を計る(勉強した時間、家から学校まで来る時にかかる時間など)
- ③ 一日の間で、花壇の植物(朝顔、ひまわりなど)が変わる点を話す
- ④ 一日の間で、人がすることの変化を話す

(7) 自分の近隣を調べる

近隣に住む人を調べて、その人たちと一緒にくらしながら持たなければならない態度を育てる。

- ① 近隣に住む人を調べる
- ② 近隣の人がする事を調べる
- ③ 近隣の人に対する態度を発表する

(8) 時間の流れにそった変化を調べる

時間の流れに沿った変化を調査して、時間の流れにそった人々の生活と自然の姿が変わるということを知り、それにふさわしく生活する態度を持つ。

- ① 年(年齢)によって変わる様相を調べる(人、品物、動植物など)
- ② 自身の変化する姿を調査して発表する
- ③ 季節によって変わる点(天気、服、遊び、人がする事、自然の変化など)を捜してみる
- ④ 季節別の特徴を絵で現わす
- ⑤ 時間によって変化するさまざまな姿を調査する

(9) 動物や植物が育つ姿を観察する

動物や植物をよく見て、動物と植物を愛して、大切にやりよく面倒を見てあげようとする心を持つ。

- ① 動物や植物の名前を発表する
- ② 動物や植物の育つ姿を観察する
- ③ 動物にエサをあげる時間や植物に水あげる時間を話す
- ④ 動物や植物をもっとよく育てることができる方法を話す

(10) おもちゃ作り

遊びや生活に必要なものなどを作って楽しく遊んでみて、もっと素敵なおもちゃを作る。

- ① 作りたいおもちゃ(実戦化、自動車など)を発表する
- ② 持ちたいおもちゃ作り(材料準備、作る方法、必要な道具と使い方、作り)
- ③ おもちゃを持って遊ぶ
- ④ もっと素敵なおもちゃを作ることができる方法を発表する
- ⑤ 面白く長く持って遊ぶためにしなければならない点を発表する

(11) 絵地図を描く

町を観察して現わそうとするものを記号をつかって絵地図を描いてみて、故郷の姿を正しく知り、愛郷心を持つ。

- ① 絵地図をしらべる
- ② 自分の学校の周辺と絵地図にある学校の周辺の他の点を捜してみる
- ③ 学校の周辺の主要機関(消防署、交番、役場など)を調べる
- ④ 自分の学校の周辺の絵地図を描く(絵地図に入れなければならないものと、絵で現わす略画、大きさの調節、描く範囲、使わなければならない色などをあらかじめ考えて描くようにする。)

## (12) 生活計画を作成する

生活計画を作成してみて、計画性ある生活をしなければならないという心を持つ。

- ① 一日をいくつかの区間で分けて現わす
- ② 面白い方法で生活計画を作成する
- ③ 計画どおり実践して、感想を發表する
- ④ 計画どおり実践することができなかつた理由を捜してみる

## (13) 店遊びする

店遊びをしてみて、生活に必要なものを作り、運んで、それを自分たちの手に入るようにしてくれる人々のありがたさを理解し、物を大事に使おうとする心を持つ。

- ① 店遊びの計画を立てる
- ② 役割決定及び資料製作をする
- ③ 遊ぶ
- ④ 各役目によって感じた点を發表する
- ⑤ ものを使う時どのようにしなければならないのか、感じた点を發表する
- ⑥ ものがわたしたちの手に入るまでの過程を調べる
- ⑦ 苦勞された人々に私ができる事を發表する

## (14) 水鉄砲遊びをする

水鉄砲を作って遊びをしてみて、水の特徴を話すことができる。

- ① いろいろな水遊びをする
- ② 水鉄砲作って、撃ってみる。
- ③ 水の特徴を調べる
- ④ 水を節約して使う

## (15) 影遊びをする

影踏み遊びをしてみて、日向と日陰、昼と夜の特徴を知ることにより、それに適した生活をすることができる。

- ① 影を作る
- ② 望む影を作る模様と物体を作る
- ③ 影ができる所を捜してみる
- ④ 日向と日陰の差異を調べる
- ⑤ 昼と夜の差異を發表する

## 4、教授・学習方法

## ア. 学校教育課程の運営

- (1) 社会現象と自然現象を区分しないで、意味があるように関連する主題等を統合して扱い、内容に従って各領域の特性を生かして指導することもできる。
- (2) 学生たちが経験する生活の場において、見て、聞いて、感じることを通して、日常生活に必要な

な習慣と能力を身につけて、自ら判断し賢く行動できるように指導する。

- (3) 全学習活動を通して資料の収集と整理および観察、分類、測定、討議などの能力を育てるようにして、探求過程および結果を文字、絵、討議または他の方法などで表現する機会をたくさん持つるようにする。
- (4) 観察、見学、飼育、栽培、作る、遊びなどの多様な活動を通して具体的で直接的な経験中心の学習になるようにする。
- (5) 全学習課程を通して、自ら学習できる習慣を形成するように指導する。
- (6) 学習の内容および活動によって、教室の空間を多様に変化させて、学習についての興味と参加度を高めるようにする。
- (7) 児童の知的好奇心と学習動機を誘発できる多様な質問をするように、創意的な思考を促進するために、学生の反応を受容する自由な雰囲気になるようにする。
- (8) 学習効率を増進するために必要だと判断される場合、学校学習時間にためらいなく学校の外での学習も実施し、学生の状況を考慮し無理な学習にならないようにし指導する。
- (9) 学習の効率化のために、多様な学習資料を利用し、周辺の実物資料や生活事例をたくさん活用するようにする
- (10) 学習や生活に使われる道具の使用方法を身につけ、正しく安全に使用するように指導する。
- (11) 教育課程に提示された活動内容と資料は、学校の実情、地域社会の特性、時事性に適合するように、学校と教師の裁量によって再構成できる
- (12) 年間、学期間、月間計画を樹立するときは、長期間の学習を要する内容、季節、行事などを考慮して教材を再構成するようにする
- (13) 指導内容によっては必要な時間を連続して運営できるし、他の教科と統合して運営することもできる。
- (14) 相互共同作業や小グループ活動を通して意思疎通能力、相互共同能力、選択・決定能力および民主的な共同生活習慣を育てるようにする。
- (15) 社会的、自然的現象の理解に加えて、次のような関連規範や情意的要素について指導が成されるようにする
  - あ) 自然と社会に対する好奇心
  - い) 生命尊重の心
  - う) 自然を保護しようとする心
  - え) お互いを愛し、助け合う心
  - お) 勤儉、節約の態度
  - か) 規則的な生活態度
  - き) 安全な生活習慣
  - く) 自ら生活する習慣
  - け) 創意的に考える習慣
  - こ) 正直、誠実な態度
- (16) 「賢い生活」の題材構成は統合の精神を極大化することができるよう構成、提示する。  
その例を提示すると次のようだ。

〈例〉

内 容 領 域						題 材 の 構 成
調べる	仕分ける	測る	調査・発表する	作る	遊ぶ	
○家族の構成を調べる ・私の家族を調べる ・家族とわたしの関係を調べる ・家族の役割を調べる ・家族に対する正しい態度を調べる						○誕生日の祝いに参加する方 ・参会する方を調べる ・私との関係を調べる ・私との関係を書いてみる (祖父、祖母、父、母、叔父、叔母、姉、兄、妹等) ・参会する方の役割を調べる (家で、職場で) ・参会する方に対して正しい態度を調べる(言葉遣い、差し向かいに座っている時の姿勢、挨拶の方法等)
	○部屋の掃除をする ・部屋を片づける ・部屋の掃除をする ・捨てる物と捨てない物を仕分ける ・捨てる物を注意して見る					○部屋の掃除をする ・部屋を片づける ・部屋の掃除をする (掃除の大変さ、掃除した後の気持、毎日掃除して下さるお母さんのありがたさ等) ・捨てる物を撮み出す (多すぎる捨てる物に対する驚き、物のむだづかいに対する反省) ・捨てる物を注意して見る ・まだ使える物を仕分ける ・捨てる物を種類別に仕分ける(仕分の基準、量の順、節約する心掛け)
			○私の家の行事を調べる ・行事を調べる ・行事の特徴を書く ・普通の日と行事の日の違いを話す ・行事の日に私がすることを発表する			○お誕生日の祝い ・来られる方に礼儀正しく行動する(挨拶、態度、言葉遣い等) ・宴会の場で正しい態度を持つ ・誕生日の特徴を書く ・私の家の行事を調べる(誕生日、祝祭日、祭日など) ・各行事の特徴を書く ・似ている行事に仕分ける ・行事の日と普通の日の違いを話す

イ. 教授・学習資料開発

- (1) 第7次教育課程の重点事項が反映、具現されるようにする。
- (2) 統合教科の精神が具現されるようにする。
  - (ア) なるべく多くの内容・時間で統合が成り立つようにする。
  - (イ) なるべく多様な形式の統合が成り立つようにする。
  - (ウ) 統合の主題は学生たちが生活で経験したこと、学生たちが関心があるようなこと、相互に異なる多様な内容を統合できることから探す。
  - (エ) 統合は適切に成り立つようにする。すなわち、別の領域の内容が自然に連携、統合され設定した目標を効果的に達成するようにする。
  - (オ) 統合するのがむずかし内容や、統合するより分離して指導したほうが教育的に効果があると判断される内容に対しては、無理な統合は揚棄する。
- (3) 教育目標の達成
  - (ア) 教科書の単元、主題、題材、授業時間で達成しようとする教育目標が明瞭であり、学習内容と学習活動はこのような目標が達成できるように構成しなければならない。
  - (イ) 教育目標の達成が確認できる情報や方法を示す。
- (4) 学生たちが興味を持って面白く読んで学べるように構成するべきであり、そのため、次の事項に留意する。
  - (ア) 学習の動機を引き起こす内容・活動を提示する。
  - (イ) 児童の生活に関連がある素材を選択する。
  - (ウ) 児童の発達水準に合う内容・活動・語彙等を提示する。
  - (エ) 児童たちが楽しみながら遂行できる活動を提示する。
- (5) 学習内容を正確に提示しなければならない。
  - (ア) 学習内容は論理性や綴字法等に誤謬がなく正確でなければならない。
  - (イ) 挿絵、写真は学習の主題と適切な関連性を持たなければならない。
- (6) 与えられた時間内に適切に指導、学習できるように学習の内容・活動を提示する。
- (7) 学習内容の構造化と系列性を考慮する。
  - (ア) 重要な概念を強調し、枝葉の問題は避ける。
  - (イ) 学習内容は単元／主題／題材／授業時間内で構造化されなければならない。
  - (ウ) 学習内容は学年間／学期間／単元間／主題間／題材間／授業時間間に系列性があるべきだ。  
(例 水準、深化反復、重複の回避、用語の統一性 等)
- (8) 創意性、探究性、想像力、表現力、自己主導的学習能力を伸張させるように教科書を構成しなければならない。
  - (ア) 学習内容と活動は、学生たちがより深く・幅広い思考をするように刺激し、誘導する。
  - (イ) 調査、実験・実習、操作、発表等学生達が直接遂行できる多様な活動を提示する。このような活動を学生・教師が従って遂行できるように詳しい案内を提示する。
- (9) 教科単元の展開の一般的な体制は教科の特性と単元の性格等に適切で創意的に構成するが、自律的な学習ができるよう、理解しやすく組織、叙述する。
- (10) 学生達が具体的な経験を通じて探究の基礎行動、すなわち観察、分類、測定、討議・意志疎通等の能力と自覚と操作協応能力(eye-handcooperation)を育てるよう、適切な素材を選定、組織しなければならない。



- (11) 幾つかの主題を実生活と緊密に連携させ、一つの単元として構成し、提示することで統合の意味が実現できるようにする。
- (12) 提示する活動や主題は教科書だけでも活動ができるよう、具体的な情報を提供するが、1年生の場合は文字よりは絵や写真を活用するようにするし、文字の解読がある程度できるようになった場合は、文字で情報を提供することもできる。しかし、その文字の解読に投与する時間が長すぎて、そのため活動に障害が起ることはないように心掛ける。
- (13) 提示する挿絵や写真に載せられた情報はなるべく単純にする。大きな一つの挿絵の中に複雑に絡まれた情報が含まれないようにしなければならない。
- (14) 授業で起られると思われる状況を設定し、提示した活動が決められた学習時間内に行われるようにしなければならない。
- (15) '私たちは1年生'教科と緊密に連携するように内容を構成しなくてはならない。
- (16) 3年生の色々な教科の内容とも密接に連携するようにする。
- (17) 1つの主題で教育しようとする目標はなるべく単純化するようにする。
- (18) 1つの主題を学習することに掛る時間は5回内外になるように構成するが、8回を過ぎないようにする。
- (19) 教科書で提示する材料は探しやすく安全で、値段が低廉で、耐久性のある手頃のものになってはいけない。

## 5. 評価

- ア. 評価は各個人の活動を中心に実施する。しかし、結果を相互比較したり、等級を付けたりして人間関係や自我意識を阻害することはないようにする。
- イ. 教育課程に提示されている次のような重要目標に対する成就水準を評価するが、多様な評価方法を使って知識、機能、態度の行動領域と内容領域の様力な要素が包括的で均衡的に含まれるようにする。
  - (1) 自分と社会及び自然との関係に対する基礎的知識の理解
  - (2) 色々な状況の中で正しく判断し行動できる能力と態度
  - (3) 観察・経験したことを正確で、創意的に表現できる能力
  - (4) 周囲の現象を理解するために必要な観察分類、測定、意思疎通等の能力
  - (5) 周囲の現象に対して好奇心を持って、持続的に調べようとする態度
- ウ. 学習の結果よりは普段の学習課程中の探究的な活動と肯定的な生活態度を中心に評価する。
- エ. 評価はなるべく児童達の興味や好奇心、自発的活動、創意的な思考等を高められるように、積極的で、肯定的な側面で行われるようにする。